

聖書：創世記49章29節～50章14節

説教：先祖の墓に葬る

## 1 先祖

### 1) キリスト教では先祖を大切にしない？

ときどき、仏教を熱心に信じている方からこんな質問をされることがあります。「キリスト教では、先祖のことを大事にしないのですか。」仏教では決められた年数ごとに法要をしたり、お盆になると家族全員が集まって先祖の墓をお参りする。それに比べキリスト教では、法要のようなことはしませんし、家に祭壇を置くこともありません。ほかの人の目には、先祖を尊敬するという態度に欠けているかのように見えてしまうのでしょうか。

では、キリスト教では先祖のことをどう考えているのか。今日はこのことをともに考えていきます。

### 2) ヤコブの遺言

今日の箇所では、臨終の間際にヤコブが息子のヨセフに遺言を託す場面が出て来ます。ヤコブは若いとき、家の財産を独り占めしようと父と兄をだますという事件を起こした人です。悪事はすぐに兄に知られる所となり、ヤコブは着の身着のまま家を飛び出してしまいます。こんなことをしてかす人ですから、自分のことしか考えていません。まして先祖のことなど思うはずもない。そのヤコブが、臨終の間際にこのような遺言をします。29節を読みます。「私は私の民に加えられようとしている。私をヘテ人エフロンの畑地にあるほら穴に、私の先祖たちといっしょに葬ってくれ。」

ヤコブにとってアブラハムは祖父であり、イサクは父にあたります。その先祖たちの墓に自分を葬ってほしいというのです。なぜこのようなことを遺言としたのはこれから見ていくとして、とにかく聖書でも先祖のことを大切に考えていることはわかります。では仏教と同じ意味で言っているのか、それとも違う意味なのか。そのことを確認しておきましょう。

### 3) 死んだ者は眠っている

わかりやすい例を挙げます。テレビドラマを見てると、こんな場面が出てきます。主人公が大きな問題にぶつかってピンチに立たされているときです。仏壇に向かってこんな風に呼びかける。「おじいちゃん。私を守って。私を助けて。」皆さんも似たような経験があるかもしれません。生きているときは、ごく普通の人だったのに、亡くなると何か超自然的な力を持つようになり、生きている人たちを守ったり、ときには反対に祟ったりする。それが日本人が持っている先祖に対するイメージではないでしょうか。

キリスト教では、そのようには考えません。死んだ者は、眠っていると言われます。眠っているのですから、生きている人のために働いたり、あるいは悪いことをすることもありません。ではキリスト教で、先祖を大切にするという意味はどういうことなのか。

## 2 ヨセフ

## 1) ヤコブの遺言を実行するための二つの問題

そのことを理解するために、残された家族たちがどう対応していったのかを見ます。実は、ヤコブの遺言は残された家族に大変大きな負担を強いることになりました。何が大変であったのか。二つ理由があります。

一つは、場所の問題。ヤコブはエジプトで死にました。葬ってほしいと言われた墓はイスラエル、カナンの地にあります。今なら立派な道路があつて、車ならば半日もあれば行ける距離です。しかし、当時は違います。大ぜいの家族を連れて移動するのですから、数週間はかかったでしょう。そのうえ炎天下での旅行になります。亡骸をそのまま運ぶ訳には生きません。ミイラにして運ばなければならぬ。大変な手間と時間を必要とします。

そして二つ目の問題。これは息子のヨセフ自身のことと関わってきます。ヨセフはイスラエル出身なのですが、今はエジプトの大臣の立場にあります。おいそれと気軽に海外旅行に出かけられません。まず上司であるエジプトの王様パロの許可が必要です。不審な動きをしていると思われれば、首が飛びます。疑われないようにと、大変な神経を使います。また、許可が出ても、旅行はお忍びでという訳にはいかない。エジプトの大臣としてふさわしく大がかりな大名行列を組まなければならない。その費用は自分で出します。大変な出費です。

## 2) それでも遺言にこだわる

ヤコブは、自分の遺言のことで家族にどれだけ迷惑をかけることになるのか、もちろんわかっていたでしょう。それでも、先祖の墓と一緒に葬ってほしいと強くこだわったの

はどうしてだったのでしょうか。

ヨセフだって、自分が直接動くのがむずかしいというのなら、人に頼んで父親を指定の墓に葬ってもらう。そんなふうに簡単に済ますことだってできたでしょう。ところが、そうしない。むしろ人々が葬儀を見て「これはエジプトの荘厳な葬儀だ」と評判になり、それが地名となって残るくらい大々的なセレモニーをするのです。どうしてヨセフは、そこまでするのか。よほどの理由があると考えなければなりません。

## 3 ヤコブの見た夢

### 1) 主の約束

話は、ヤコブがまだ若かったときにさかのぼります。ヤコブが、財産を横取りしようと父と兄をだましたことを最初に触れました。そのヤコブは兄に殺されそうになって逃げ出すのですが、その旅の途上で不思議な夢を見ます。その夢の中で神が現れ、このような約束をいただきます。創世記 28 章 13 節と 15 節。「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしはあなたがた横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫とに与える。」「見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」その声を聞きながら、天を見上げると、天と地とを結ぶはしがかけられ、そのはしごを神の使いたちがのぼりくだりしているのが見えました。この夢をきっかけにして、ヤコブは変えられていきます。自分のことしか考えなかった人が、少しずつ人の痛みがわかる砕かれた人間となり、信仰者とへと変えられていきま

す。

## 2) 生きている者の神

やがて、臨終を迎える日が近くなったとき、若いときに見たこの夢のことが思い出されました。今自分はエジプトの地にいます。もしあの夢の中で語った主の約束が真実であるというのなら、自分は必ずカナンの地、約束の地に戻るようになるはずですが、今の状態では生きている間に戻ることはかないそうにありません。死んだらすべてがおしまいです。主の約束は嘘だったのか。やっぱり神さまにもできないことがあったのか。

そんなはずはありません。主は一度語った約束を必ず果たす方です。とすると、主の約束はどのようにして果たされるのでしょうか。死んだらおしまいでないのです。こんな言い方は奇妙に聞こえるかもしれませんが、たとえ死んでも十分に間に合うのです。どうしてそんなことが言えるのか。

主は言われました。「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。」このみことばに注意してください。大変深い意味が込められています。ヤコブがこの声を聞いたとき、先祖であるアブラハムもイサクも死んでいます。もう地上にはいません。「彼らが生きていたとき、わたしはあの人たちの神でした。」そういう意味ではありません。主はルカ 20 章 38 節でこう言われます。「神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。」人の目には、アブラハムもイサクも死んだように見えるのですが、神の目にはふたりは生きているのです。だから堂々と「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である」と言われます。過去のことではなく、現在進行形の表現です。

ヤコブは理解しました。自分はエジプトの地で死ぬけれど、間に合わないのではない。この体はやがて滅びるけれども、主はこんな罪深い私を救い、永遠に生きる者としてくださる。主がこの私を約束の地に必ず連れ戻してくれる。主はこの私を、必ず先祖とともに死からよみがえらせてくださる。ヤコブが先祖の墓に葬られることを心から願うのは、こんな理由からでした。

## 3) よみがえりを信じて先祖の墓に葬る

ヨセフは、たくさんの難しい問題があったにもかかわらず、父の遺言どおりに亡骸を先祖の墓に納めることにこだわり続けます。主が語られた、「あなたをこの地に連れ戻そう」、その約束を主が果たそうとしていることをヨセフは自覚します。

アブラハム、イサク、ヤコブ、彼らはみなわたしたちの先祖です。主が彼らをよみがえらせてくださるのなら、アブラハムの子孫とされた私たちにも同じことをしてください。

先に召された信仰の先輩たちもそのことを信じ、召されていきました。先輩たちはいま先祖たちの墓に葬られ、眠っています。けれども、主の再臨の日によみがえらせていただきます。ともに手を携えながら再び会う日がやってきます。それが私たちの望みです。

今日、改めてその約束を信じて歩みたいと願います。